

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.62

「帆樫成林」とは？
帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。



博物館実習(7/23～8/2)でのひとコマ
「暮らしの中のデザイン」をテーマとし、夏の暮らしと関わる資料から身の回りのデザインに注目する展示を制作しました。

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.62

印刷/株式会社博進堂
編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
帆樫成林「はんしゅうせいりん」第62号 発行日 令和6年9月12日

CONTENTS

特集1 開館20周年を迎えて	P.2~4
歴史さんぽ	田の神送りの石碑(横戸地内) P.5
おすすめの一冊	上堀田ものがたり P.5
特集2	第21回 むかしのくらし展「くらしの環境」紹介 P.6
館長日記	世界遺産佐渡金山と近世近代遺跡 P.7
収蔵資料紹介	「窓の雪」(積雪科学館) P.7

《ボランティアフェスティバル2024》

みなとぴあのボランティアスタッフが企画する、みなとぴあ20周年を記念したさまざまなプログラムを楽しみましょう。
【日時】10月5日(土) 10:00~15:00 ※雨天決行

プログラム名	内容	会場	対象・定員・参加費
たいけんプログラム	上り人形、ぶんぶんゴマなど、むかしのあそびを楽しみましょう。	本館1階たいけんのひろば	どなたでも・無料
常設クイズラリー	展示室でクイズに挑戦しましょう。全部答えたら景品プレゼント!	本館2階常設展示室(観覧券が必要)	どなたでも・観覧料(一般300円 大学生・高校生200円 中学生・小学生は無料)
業務艇あさひで西港見学	船で新潟西港をめくり、ボランティアによるガイドを聞きながら見学します。(協力:国土交通省北陸整地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所)	集合場所:本館入口	小学生以上・定員48名(本館入口にて9:30より整理券を配布)・参加費100円
お茶会	抹茶やお菓子のほか軽食を販売します。	旧第四銀行住吉町支店1階	どなたでも
うたこえ手芸広場	歌や手芸を楽しみましょう!	旧新潟税関庁舎	どなたでも・無料

そのほか、旧第四銀行住吉町支店2階会議室にて、Nゲージ鉄道模型走行会を同時開催します。(協力:新潟趣味鉄振興会)

次回企画展

第21回むかしのくらし展 くらしの環境

新潟市市域は多様な環境を有し、人々はさまざまな形で自然を利用して生活を営んできました。今年度のむかしのくらし展は、市域の人々が営んできた暮らしを、環境という視点から振り返ります。

会期 2024年9月14日(土)~12月1日(日)

開館時間 9月▶9時30分~18時、
10月・11月・12月▶9時30分~17時
(観覧券の販売は閉館30分前まで)

休館日 毎週月曜日(9/16・9/23・10/14・11/4は開館)、
9/17(火)、9/24(火)、10/15(火)、11/5(火)、11/26(火)

観覧料 無料

ミニスタンプラリー

日時:会期中
集合場所:本館1階企画展示室
(スタンプ用シートは企画展示室受付で配布)
参加費:無料
申し込み:不要

むかしの「運ぶ」道具をつかってみよう

日時:①9月21日(土)、②9月22日(日)
14時~15時
会場:芝生広場
(みなとぴあエントランス前)
対象:小学生までの子と保護者
参加費:無料
申し込み:不要、定員各回10組ずつ、先着順

新潟のハマをみる・きく・あるく

日時:10月26日(土) 13時30分~16時
会場:ゆいぽーと・西海岸公園周辺
対象:小学生までの子と保護者
参加費:200円
申し込み:必要、定員10組、先着順、
10月9日(水)9時30分より受付開始

新潟市をすくろくにしよう

日時:①11月23日(土祝)②11月24日(日)
14時~15時
会場:本館1階たいけんのひろば
対象:小学生までの子と保護者
参加費:無料
申し込み:不要、定員各回10組ずつ、先着順

関連イベント

次回企画展

「収蔵品・新収蔵品展」 同時開催「新令和版 弘長寺二十五菩薩来迎図」展

テーマを設け館の収蔵品を紹介、さらに今年度の新収蔵の資料をご紹介します。同時開催では、日本画家・永吉秀司氏が手がけた「弘長寺壁画プロジェクト」(関川村)を紹介し、画家の地域貢献や新たな文化財修復方法を提唱します。

会期 2024年12月14日(土)~2025年1月26日(日)

開館時間 9時30分~17時(観覧券の販売は閉館30分前まで)

休館日 毎週月曜日(1月13日(月)は開館)、
12月28日(土)~2025年1月3日(金)、1月14日(火)

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】10時30分~12時 【会場】本館2階セミナー室
【申し込み】要事前申し込み(定員60名程度) 【資料代】無料

- ◆9月の講座:9月22日(日) ※申し込み開始:9月4日
廻船と小澤家—「北前船と新潟」展の振り返り— 講師:安宅俊介
- ◆10月の講座:10月27日(日) ※申し込み開始:10月9日
新潟の「うまいもの」と美術家たち 講師:星野立子
- ◆11月の講座:11月24日(日) ※申し込み開始:11月6日
民俗から見る蒲原の自然とくらし 講師:森行人
- ◆12月の講座:12月22日(日) ※申し込み開始:12月4日
明治前期新潟富裕層の旅—小澤家資料を通じて— 講師:若崎敦朗

お知らせ

■2024年12月28日(土)~2025年1月3日(金)まで
年末年始のため休館します。

旧小澤家住宅企画展

- 新潟郵趣会展「オリンピックイヤー—よせて—時代と共に生きる切手の世界—」
会期:9月14日(土)~10月6日(日)
- 「新潟仏壇工芸」展 会期:10月12日(土)~11月4日(月)
- 小澤家の品々「明治期東京土産写真」展 会期:11月16日(土)~12月22日(日)

開館時間:午前9時30分~午後5時 休館日:原則月曜日、祝日の翌日、年末年始
入館料:一般200円 小中学生100円(小中学生は土・日・祝日は無料)
所在:新潟市中央区上大川前通12番町2733(みなとぴあから約800m、徒歩12分)
TEL:025-222-0300

編集後記

みなとぴあは2024年3月27日をもって開館20周年を迎えました。そのため、今回の特集は年表なども含めて、この20周年を振り返るものとなっています。振り返ると、多くの方々に関わりながら様々な企画、事業を行わせていただきました。今までみなとぴあに関わってくださった全ての方々へ感謝申し上げます。次の10年、20年も市民の皆さんのお声を大切にしながら活動していきたいと思えます。(貝沼)

お問い合わせ・申し込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとぴあ
住所:〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel:025-225-6111 Fax:025-225-6130
E-mail:museum@nchm.jp URL:https://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00/(10-3月)9:30~17:00



2024.7月現在

みなとぴあ便り

最近では新潟市でも外国人観光客が増えています。当館もその例に漏れず、外国人観光客が毎日のように訪れるようになったことから常設展には英語の解説文を設置、館内のサインはピクトグラムを多用し、外国人でも使いやすい施設になるよう工夫しました。今後は日本を訪れる外国人観光客だけでなく、新潟市内に住む外国人のボランティア活動や体験プログラムの参加など、日本人とは異なるバックグラウンドをもつ人々とともに地域社会を育み、多文化共生社会の一助となるような運営についても考えなければならないと感じています。(企画普及課 石田)

「みなとぴあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



(順不同)

開館二十周年を迎えて

小林 隆幸

二〇二四年三月二十七日、「みなとびあ開館二十周年感謝祭」を開催しました。

日頃の感謝を込めて、来館者には紅白まんじゅうを配り、二十周年に開催した企画展を画像で振り返りました。また、祝賀ムードを高めるとともに、新潟市の文化芸術に触れていただく機会として、古町芸妓による舞を館内で上演しました。平日の午後とはいえ、多くの市民が駆けつけ会場を盛り上げてくれました。

この日までの来館者は累計二二三万一千人、多くの方々にご利用され、支えられてきたことに感謝する一日となりました。



開館20周年感謝祭

市民に支えられて二十年

「みなとびあ開館二十周年感謝祭」を主催・実施したのは、館のボランティアスタッフが中心とした有志の「みなとびあ開館二十周年感謝祭実行委員会」です。感謝祭に必要な費用も実行委員会が賄ってくれました。こうした市民の支えがあって館の事業を継続することができています。

当館のボランティアは開館当初から発足し、現在一三四名が登録し、展示や施設のガイド、創作体験活動などに従事してくれています。出勤回数は年間二〇〇回を優に超え、館の事業にはなくてはならない存在になっています。

館を支えてくれていた市民はもちろんボランティアスタッフだけではなくあります。当館が所蔵する歴史資料の多くは市民からの寄贈によるもので、歴史資料にかかわる市民の協力も館には欠かせません。二十周年に約七七〇件の資料寄贈があり、それが新潟市にとってかけがえのない財産になっています。ただし、博物館は古いものを集めればよい施設でもありません。みなとびあの場合は新潟市の歴史にかかわる資料が収集の対象になります。それらは新潟市で暮らす人々が、地域と自分たちの生活を振り返り見直すときに、貴重な情報を与えてくれます。そのため旧所蔵者には資料の提供だけでなく聞き取り調査にも協力していただき、資料のこれまでの経緯や所蔵者との関係、地域とのかかわ

変化する歴史解明の対象と市民交流

みなとびあでは、「新潟市域の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めるとともに、歴史を媒介とした市民交流を行う」ことが条例に定められています。これは開館以来変わることのない館の活動規範になっています。

開館後、この例文の内容を達成するうえで変化したことがあります。一つは「歴史的特性を明らかに」する対象の新潟市域が拡大したことです。開館翌年、二〇〇五年の大合併により市域は三倍以上となり、館の活動域も拡大しました。それまで対象にしていなかった他市町が加わったことで、あらたな調査・研究も必要になりました。それまで砂浜海岸と平地に限られていた市域に岩石海岸や丘陵部が加わり、自然地形もバラエティに富むようになりました。地形など自然環境は人々の暮らしに大きな影響を与えます。遅ればせながら現在、市域を山・潟・浜の自然環境で整理し、そこで培われた歴史をひも解く試みを実施し、講座形式で市民に伝えています。こうした活動も新たな歴史的特性の解明につながるものと考えています。

そして、もう一つが「歴史を媒介とした市民交流」の形です。開館当初は、主に展示や教育普及事業を通じた市民交流を進めてきましたが、その後、調査・研究分野での市民の参画を試み、文化庁の博物館支援事業に申請して財源を賄いながら、市民参加型の調査・研究事業を行うようになりました。

二〇一五年・二〇一六年には「湊祭復元



市民参加の墓石調査

事業」とし、江戸時代に行われていた湊祭の状況を掘り下げるとともに、大正時代につくられ長く放置されていた祭りの纏を復活させ、二〇一七年には「墓石に近世新潟町の歴史を探るプロジェクト」と称し、寺町に残る江戸時代の墓石を調査し、そこから読み取れる歴史解明を試みました。また、二〇一九年には「新潟開港二五〇年 新潟古町の記憶と魅力発信事業」とし、市中央区の古町地区をフィールドにその歴史と魅力を探るワークショップを開催し、二〇二二年には市民参加型の地域学「古町学」を立ち上げ、「古町学始め」として、古町地区の商店街でのフィールド調査、古町地区で活躍する方々へのインタビューなどのほか、江戸時代に行われていた古町芸妓が通りを練り歩く「古町芸妓の白山詣」の再現を試みました。こうした取り組みは、博物館の器を飛び出た市民交流の拡大といえるかもしれません。

盛り上がる地域の歴史学習とその発信

地域の歴史を知ると地域に愛着がわき、その地域に暮らしていることに誇りが持てるようになります。これまでの博物館活動りなどを伺い、資料情報として整理しています。そのほか、館の近隣の方々も館を支えてくれています。特にこの周辺には地域の良さを見直し地域を盛り上げていこうとする団体が複数あり、館の活動にも理解を示してくれています。定期的な館を会場にしたコンサートや季節の行事などを開催し、施設の有効利用をはかりながら集客にも一役買ってくれています。

そして近年、事業費の面からの協力者も現れるようになりました。当館に限らず多くの公共施設が予算面で厳しい状況にあります。その不足を補うべく当館では「歴史発見プロジェクト」と称する自主事業を立ち上げ、館独自で財源を確保しながら事業を進めています。その主要な財源が企業をはじめとする団体の方々からの協賛金です。現在、十一団体が本プロジェクトに協力してくれています。これによって、予算減となっても事業を縮小することなく、開館以来の事業数を保つことができています。こうした協力を得ることができたことは、これまで行ってきた活動が認められた結果であると受け止めています。



古町地区でのフィールド調査

そして今年度は旅行社と共同し、地域のボランティアガイドと連携した観光ツアーを企画しています。つまり、観光を通じた市民交流です。観光と博物館が結びつくことに対して批判的な見方もありますが、当館では地域の歴史・文化を発信する一つの手段と考えています。

二十一年目からのみなとびあ

先述の条例には続きがあり、「市民の社会的活動及び文化的活動に寄与することを目的」とあります。この実現が館の究極の使命です。ただしこの目的の実現に確立した手法があるとは思えません。これからも試行錯誤は続き、その時々でのニーズや社会情勢に左右されながら臨機応変に対応していくことが求められると考えられます。

二十年を振り返って思うのは、これから先も固定観念にとらわれずチャレンジ精神を忘れずに、館の目的を果たすために考え続け実行に移すことが必要だということです。

(こばやし たかゆき 副館長)



まちあるき(大野)



まちあるき(白根)

て現在、東区を除く市内七区にボランティアガイドが存在しています。こうした活動の原点に博物館の存在があったとしたりありがたいと思っています。



田の神送りの石碑 (横戸地内)

新潟市西蒲区横戸地内。北陸自動車道高架下付近の県道218号線の用水路脇に、ひとつの碑が建っています。表面に刻まれた文字は風化し、道路からは石段で繋がっている、どこにでもあるような碑ですが、実はこの地域におけるかつての稲作と深くかかわるものでした。

米どころ・新潟。しかしその歴史の大半は、排水不良の土地において、暮らしや稲作をいかに成立させていくかに終始しました。排水不良が解消されて乾田化が進むまで、不安定な土地で稲作を主に生活を営んできた人びとは、どのようにしてそれらを受けとめてきたのでしょうか。

全国的に、稲作には栽培過程の区切りごとに行われる儀礼があり、これは大きく5つから構成されています。これには、豊稔祈念に行われるオタウエ神事などの予祝儀礼、苗代への播種にともなう播種儀礼、田の神を迎え送るためのサナブリなどの田植え儀礼、稲の成育を願う虫送りなどの成育儀礼、稲刈り頃に行われる田の神送りなどの収穫儀礼が挙げられます。いずれも稲の無事の生育・収穫、そしてムラや家の安定を願った儀礼であり、こうした儀礼のうち収穫終わりにともなう「田の神送り」における重要な場所がこの碑の立つ空間でした。

この地域の「田の神送り」の概要は以下の通りです。

稲刈り終了を控えた旧暦10月29日の朝、子どもたちが「志あげてくらしゃい」と言いながらムラの各戸を回る。各戸からは米や金銭

が集められ、ムラからは御神酒とお明し(灯籠)が用意される。神社の大鳥居に竹と縄で神の通路を作り、男児と女児一名ずつが「神明宮おわかれ候」、「諏訪宮おわかれ候」の札を背負い、後ろを振り向かずに裸足で通路からムラの外れの川へとつながるセキまで走る。このセキとは、用水を引いたり排水を行ったりするための水路で、御神酒・お札・お明しを藁で作った舟に乗せ、ここから流して見えなくなるまで見送る。

まさにこの碑の場所が、かつて田の神をムラの外へ送るための場所でした。

従来、低湿地の稲作儀礼に関する詳細な報告はほとんどなく、一部では儀礼や信仰に対しての意識は希薄であったという印象が根付いていました。しかしながら、このほかにも稲作に関する儀礼は語り継がれており、技術や慣習を駆使しつつ低湿地に暮らし続け、豊作を祈っていたようすが窺えます。

山田 祐紀(やまだ ゆうき 学芸員)



おすすめの1冊

上堀田ものがたり

上堀田は当市北区の南端、阿賀野市に接する所にあります。駒林川の左岸側に寄り添うように住居地を形成し、背後には耕作地が広がる自然豊かな集落です。本書によれば令和五年十二月時点では七〇戸があり、一七二人が暮らして居るそうです。本書は上堀田に暮らす筆者が史料を捜し、たどる丹念に聞き取りを行いつつ、自身の考察とともに当地の歴史を明らかにしたものです。巻末には関係年表を備え、全体の構成は、当地の歴史を網羅した目録の行き届いたものであり、当地に直接関わりのない人であっても親しくその歴史を学べる内容となっています。特に上堀田神楽の歴史と、令和に復活するに至ったその道程に紙幅が多く割かれている点が大きな特徴と言えるでしょう。また、紙面には古写真に留まらず、現在の写真もふんだんに掲載されており、未来の人びとに向けた歴史的な記録としても重要な意味を持つものであると思います。



関口 雄拓 著
2024年
なかたに印刷 発行

(安宅 俊介 学芸員)

みなとびあ20年のあゆみ



2004.3 みなとびあ開館
開館初回企画展「にいがた街の記憶」開催

2004.9 来館者20万人達成
開館記念特別展「長安文物秘宝展」開催

2004.12 博物館ニュース「帆檣成林」第1号刊行

2006.1 来館者50万人達成

2006.7 新潟市合併記念展「新潟の舟運」開催

2007.5 中華人民共和国西安博物院との友好提携に関する議定書の締結

2007.10 みなとびあファンクラブ始動

2008.9 開館5周年・新潟開港140周年記念特別展「絵図が語るみなと新潟」開催

2009.7 水と土の芸術祭連携事業「蒲原平野の20世紀」展開催
来館者100万人達成

2009.9 新潟市・ハルビン市友好都市締結30周年記念特別展「ハルビン金代文化展」開催

2009.10 皇太子殿下行啓(第9回全国障害者スポーツ大会に御臨席のため来県・みなとびあ来訪)

2011.7 旧小澤家住宅 開館

2014.3 みなとびあ開館10周年
開館10周年記念特別展「大新潟湊展」開催

2014.10 ボランティア企画「みなとびあ10周年感謝祭」開催

2015.1 新潟市・沼垂市合併100周年記念展「沼垂」開催

2015.4 みなとびあ歴史発見プロジェクト始動

2015.7 湊祭復元事業として三番町の纏(まとい)を組み立て

2015.9 中華人民共和国西安市より兵馬俑のレプリカを受贈

2018.12 来館者200万人達成

2019.1 旧新潟税関庁舎 リニューアルオープン

2019.6 新潟古町の記憶と魅力発信事業 実施

2019.7 新潟開港150周年記念展「開港場新潟展」開催

2020.4 おうちみなとびあ・おうちミュージアムがHPにてオープン

2021.7 「古町学」始動

2023.4 高校生ボランティア活動開始

2024.3 みなとびあ開館20周年



むかしのくらし展は、博学連携の事業の一環として開館以来毎年開催し、多くの小学校の学習に利用されています。

内容は小学校社会科での学習活用を想定して、主に近代の日常生活・生産の道具を展示しています。また、毎年異なるテーマを設けて、これらの道具を様々な角度から紹介しています。

今年度のくらし展では、社会科単元の目的の一つである「地域の特色ある地形と土地利用の様子、人々の生産活動」を踏まえ、新潟市の地理的な特色を紹介するとともに、それぞれの地域で営まれてきたくらしの道具を中心に展示します。

そのため、テーマは「くらしの環境」としました。環境という言葉は広い意味を持ち、大地や海、山、川などの地形に加え、気象や動植物相等、私たちが物理的に取り巻いている自然環境を意味します。生活を営む上で依拠する家族や親族、集団や組織、制度や慣習なども環境にとらえることができます。今回のくらし展では、地域の人々が地形をはじめとする周囲の自然環境に対応して、それぞれの場所で生活するために働きかけてきた諸活動を、地図資料と生産・生活の道具を通じて紹介します。

展示室では、はじめに越後平野の中央に位置する新潟市域が、信濃川・阿賀野

川の流域を有し、市の北側には長大な海岸線、西側には角田山から弥彦山へ連なる山地、南側には新潟の丘陵を有している様子、大判の地形図で展示します。

現在の地形図だけでは、開発が進んだ街地の地形が見え難いため、明治四十四(一九一一年)年測図の地形図を併せて展示します。市街地の開発が大きく進む以前の地域の自然環境を見た上で、それぞれの地域で使われた農具や漁獲採集の道具を展示します。

展示の前半では稲作の道具を紹介します。令和五年度新潟市統計書によれば、現在の新潟市の経営耕地の総数二八四六三ヘクタールのうち、田が二五六三五ヘクタールと経営耕地の約九割を占めています。明治四十四年測図の地形図を見ると、現在の市街地にも水田が広がっています。集計の基準が異なりますが、約百年前の昭和四(一九二九年)農業調査結果では、現在の新潟市域に合併した新潟市及び北・中・西蒲原の町村の耕地を集計すると(ただし非合併の集落分を含む)、田の合計が約三三六〇〇ヘクタール、耕地の八割以上を水田が占める町村が六割あり、改めて水田稲作が卓越した地域であることがわかります。明治の地形図には、現在は干拓され、水田や市街地へと姿を変えた潟や湿地が記

載されています。低地の湿地帯に水田を拓き、広げてきた地域の人々の足跡を、開墾具を通じて紹介します。

一方、畑の面積は二三〇三ヘクタールと現在の経営耕地の八パーセントになります。昭和四年の農業調査では現在の市域を構成する当時の町村のうち、一二の町村では田より畑の耕地面積が大きくなっています。

五〇〇ヘクタール以上の畑地を有する町村のうち、横越村の耕地を見ると、農業調査より少し時代をさかのぼる大正六(一九一七年)年「横越村是」によれば、約六八八九反の田に対して畑は約一〇〇七六反となっています。この時期、一般に畑作物では大豆の割合が多いのですが、横越村では作付面積が大きい大豆、麦の他に、阿賀野川下流域の自然堤防の集落では養蚕に用いる桑の植付面積が大きくなっています。昭和一〇年代に入ると不況対策と食料増産のため、桑畑を水田に転換する開田事業が進められますが、この当時は、養蚕業は「本村の一大副業」として、米稲作に次ぐ主要な産業と位置付けられていました。

また、「梨樹栽培は大字二本木、木津方面に副産として認められ近年ますます向上しつつあり」とも記されています(「横越村是」)。梨は新潟県農会明治

四十四年刊「新潟県園芸要鑑」の緒言に「本県は古来梨の生産地」と記し、梨の産地として北・中・西蒲原で二二三の産地を挙げています。

畑作に関わる生産用具の収集数は決して多くはありませんが、桑や梨の収穫具の展示を通じて、園芸作物の歴史の一端を紹介します。

このほかにも、海や川、潟の漁具など、それぞれの自然環境のもとで営まれてきた生産活動に使われた道具を展示します。

(もり ゆきひと 学芸員)



梨収穫用の籠(江南区二本木・当館蔵)

世界遺産佐渡金山と近世・近代遺跡

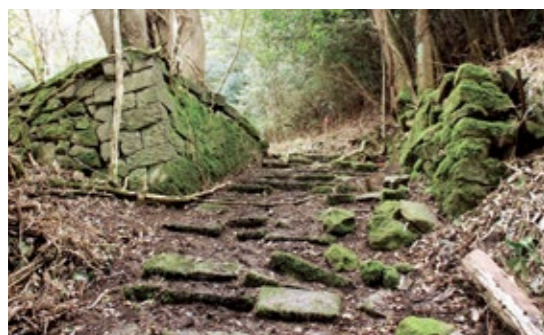
七月二十七日、「佐渡島の金山」はめでたく世界遺産に登録されました。世界遺産となるのは、相川金山と鶴子金山及び西三川砂金山です。佐渡の金山は、戦国時代末から本格的に始まり、江戸時代前期には世界的な規模となりました。近代、戦後まで継続しました。世界遺産に登録されるためには、対象となる遺跡等が国の史跡等に指定されていなければなりません。遺産保護のための規制をかけるためです。佐渡の場合、相川金山については一九九四年に国の史跡に指定されましたが、それは金山のシンボル道遊の割戸や佐渡奉行所跡、宗太夫坑等、全体のごく一部です。それ以外は、鶴子金山・西三川砂金山を含めて何の指定もされていませんでした。

新しく記録も豊富で、文化財としての価値が低いと考えられていたのです。最近文化庁は、日本鉄道史の原点、東京都高輪築堤跡の発見と保存を契機に、近世・近代遺跡の意義をあらためて提起しています。この半世紀、時代・社会が大きく変化し、普遍的であった近世・近代の文化財が急速に失われていきます。近世・近代に大きく発展した新潟市には、港湾・都市、治水・灌漑等の貴重な遺跡・文化財が豊富であり、見直しが必要です。



新潟市歴史博物館 館長 坂井秀弥

世界遺産の見所の一つに、相川の山中に江戸時代の鉱山跡がそっくり残っている上相川・上寺町地区(写真)があります。ここが行政的に遺跡(埋蔵文化財包蔵地)として認知されたのは、県の遺跡分布調査で遺跡の実態が知られるところとなった一九九〇年頃です。それまでは、江戸時代の遺跡



相川上寺町地区(佐渡市提供)

収蔵資料紹介

『窓の雪』(積雪科学館)

長岡市でかつて活動していた博物館「積雪科学館」の機関誌です。昭和二十九(一九五四年)年の創刊から三十七(一九六二年)年に休刊するまで、全四五号が、毎年秋から春にかけ毎月半を国立国会図書館デジタルコレクション上で読むことができます。当館が所蔵するのは、二号(一九五四)と六号(一九五五)の二冊です。平成二十二年(二〇一〇)年度に寄贈を受けた、金塚友之(一九九〇〜一九七二)旧蔵の資料群に含まれています。

積雪科学館は、県内を始め、国内の積雪地方の暮らしをより良くすることを目的に、昭和二十四(一九四九年)に開館しました。運営したのは、当時の北越製紙社長・田村文吉(二八八六〜一九六三)



らが率いた財団法人積雪研究会、建物、長岡工業専門学校(現・新潟大学工学部)の敷地内にありました。気象学等の科

学的観点から雪を研究すると共に、雪深い地域に伝わる民間伝承や古文書、民具等を調査・収集し、その成果を、展示や教育活動を通じて世に広めました。昭和四十三(一九六八年)年の閉館後、三五〇点超の民具が現在の長岡市立科学博物館へと引き継がれています。「窓の雪」は、館の事業を普及するための媒体であり、関連分野の研究者による論考のほか、文学者や芸術家による随筆や絵、館の活動報告も掲載されました。

本誌を所蔵していた金塚は、新潟の歴史研究において、民俗学・考古学・歴史学に跨り大きな研究業績を残した人物ですが、当館所蔵の二冊には寄稿を確認できません。しかし、旧蔵の事実から、同氏の関心の在処や交友関係を推測することはできそうです。

また、積雪地方の生活を改善しようという動きは、昭和戦前期より国内各地で盛り上がりを見せ、政治・経済から文化芸術方面に至るまでの様々な人が、議論と実践を繰り返してきた歴史があります。その延長線上に、戦後、新潟という場でのような取り組みがなされたのか、考えるヒントを与えてくれる資料と言えるでしょう。

(星野 立子 学芸員)